

歌の文句を振り返り・・・
ついでに日本語を考えてみる

♪おえどにほんばし ななつだち はつのぼり ぎょうれつそろえて アレワイサノサ
コチャ たかなわよあけのちょうちんけす・・・♪

東京へ出てきた小学校六年生の頃、まだ日本橋も見たことがない私は「日本橋七つ立ち」って何だろう、何が七つ立っているんだろうと気になった。

「日本橋を七つ（早朝三時か四時頃）に出発して西へ向かって歩くと、5～6Km 歩いて高輪あたりで夜が明けて、提灯を消す」と唄っていることがわかったのは大分あとのことだった。

歌詞を見て歌った歌は、漢字で書いてあればほぼ意味がわかって来るが、耳で覚えた歌や言葉は意味がわからないので意外な思い違いや思い込みが支配していることが少なくない。

ラジオで育った我々世代の子どもの頃は、最初に音で入ってきた情報に、後から文字で入って来る情報が補完をしてくれてその意味がわかるということが普通だった。

「お富さん」という歌謡曲が流行った頃、「粋な黒兵衛 神輿の松に 仇名 姿の荒い紙」と頭に入ってしまった、想像しても想像しても意味がわからなかった。

文部省唱歌の中にも難しい歌が沢山あり、それだけに勘違いも沢山あった。

さぎりきゆるみなとえの ふねにしろきあさのしも・・・<冬景色>

「さぎり」ってなんだろう？ 「港への」ということは港へ向かう船のことか・・・
(狭霧消ゆる湊江の 舟に白き朝の霜)

はるのうららのすみだがわ のぼりくだりのふなびとが かいのしずくもたまとちる・・・<花>

「貝のしずくも玉と散る」貝を採っている漁師の手元の貝からしたたり落ちる雫のことかな
(春の麗らの隅田川 上り下りの船人が 櫂の雫も玉と散る)

小学校の低学年で覚えた歌は、耳で覚えたり、ひらがなで覚えたりなので、こういった経験をしている人は少なくないはずだ。高学年になってから覚えた歌は、歌詞にカナがふってあるので助けになった。

意味がわからなかったら辞書で調べてみようと思うことができる年齢になれば、それによって意味が理解できさらに知識の幅が広がりもする。

故郷と言う歌を「うさぎ美味し かの山 小鮒釣りし かの川」と思いこんでいた人の話を聞いたことがある。昔は野山から食の糧を得ていたのでこういう歌の文句ができたのだろうなと納得していたと言っていた。勘違いは私だけではなかったとひそかに安心した記憶がある。

我が国の国歌も同様の危険にさらされている。小学校に入ると儀式がある度に歌わされたが、詩を見せられてその意味の解説を受けたのは随分後になってからである。

君が代は、耳で聞くとこういうことになる。小学校の低学年では全く意味がわからない。

「きみがあよーは ちよにいいやちよにさざれ
いしのーいわおとなありてー こうけーの むうすうまーああでー」

全般に子どもには理解できない詩になっているが、さらに「さざれ」と「いしの」の間が途切れているので「さざれ石（細かな石のこと）」という単語は到底思い付かない。前後をきちんとつなげると「小石が大きな岩となり、やがて苔むす大岩となるまで・・・」と語っていることなど、小学校低学年の頭脳では、到底思いもつかない。

大瀧詠一作詞作曲の「夢で逢えたら」という歌がある。吉田美奈子の歌で世に出たようだが、その後数多くの歌手が歌ったり音楽家たちが編曲したりして、海外にまで広がっているらしい。この歌がラジオに頻繁に

登場する時期に（聞きたい曲でもないが勝手に耳に入ってくるので）いつの間にか覚えてしまった。

「夢でも しあえたら 素敵なことね あなたに逢えるまで 眠り続けたい」

初めて耳にした時「何と品のない歌だろう？」というのが印象だった。

「夢で もし逢えたら素敵なことね」と歌っていることがわかったのはかなり後だった。

題名を知らずに耳で入ってきただけで覚えた上に、歌手の歌い方の関係で「逢えたら」という言葉が聞こえずに「しあえたら」という言葉が浮き出していた。曲と詩が一体となって、しかもひとつひとつの言葉を大事に取り扱った詩であればこのような誤りは起きないはずだ。

1980年代に流行ったチェッカーズの歌「ジュリアに傷心（「ハートブレイク」と読む）」

「キャンドル ライトが ピアスに反射けて滲む・・・

ハートブレイク サタデナイト 悲しいキャロルがショウウィンドウで 銀の雪に変わったよ」

横文字ともカタカナ語ともつかない言葉が飛び交い、しかもじっくり聞いていても歌詞の意味が良く伝わってこないし、情景が思い浮かばない。何故かこの時代にはこういう歌が流行った。

そして遂に横文字化・カタカナ化では飽き足らず「日本語を巻き舌で発音する歌」が登場する。湘南海岸の若者グループが新しい歌をどんどん世に送り出すが、「美しい日本語の歌」には程遠いものが多かった。

1970年代に活躍した異質な歌い手、ちあきなおみが歌った「喝采」という歌は、日本人なら誰が聞いても意味が良くわかる、しかも情景を思い浮かべて「聞いている人がそのシーンに引きずり込まれてしまう」不思議な歌だった。

「いつものように幕が開き 恋の歌うたう私に 届いた報せは黒い縁取りがありました」

全曲を通じて「歌詞と旋律が同期が取れていて」「平易な日本語で語るように」歌う歌だったので、特殊な情景を歌った歌にも関わらず多くの人に好かれたのかもしれない。

2000年代に入って早15年、近頃新聞やテレビのニュースに登場する言葉を見ていると「ひらがな表記」が目立つ。こんな字が漢字ではなぜいけないのだろうと疑問に想うこともしばしばである。

町村合併で生まれた市の名前が「さいたま市」「みどり市」「さくら市」などなど、鉄道の駅の名前を見ても「さがみ野」「かしわ台」「ひたち野うしく」などなど。

過度に横文字化しカタカナ化して乱れてしまった上に、さらに漢字離れまでしてしまったのでは日本語はどこへ行ってしまおうのだろうか。

「もっと日本語を！！」、「もっと漢字を！！」と痛切に感じるこの頃である。

以上